

地域の高齢仲間と楽しみながら凧や竹細工を創作

活動地域（山形県山形市）

男性のプロフィール

氏名：海和 昌蔵さん

年齢層：高齢者層（60歳以上）

活動概要：地域の高齢男性らと「出羽凧クラブ」を結成し、凧、竹細工などの製作活動を行っている。そのための活動拠点として、自宅の一部を作業小屋として開放し、交流を図っている。

活動開始のきっかけ

山形の北はずれ。子どもたちの遊び場を親父たちでつくったのが最初のきっかけ

昭和38年ごろ、私を含めて、何名かのお父さん世代が婿養子として、他の地域から山形の北はずれにあるこのまちへやってきました。私たちは顔合わせのために、「石ころ会」と名づけた活動組織を作り、互いの交流を図るとともに、何か地域のためにできることはないかと話し合いました。ちょうどこのころ、地域に遊園地や公園などがなく、子どもたちの遊び場がなかったことから、遊び場を作ることを思いつき、付近を流れる川の旧堤防と新堤防の間の遊水地に、お金をかけずに、桜の木などの苗木を植えたり、鉄棒やタイヤを配置したりして、子どもたちの遊び場を手作りで完成させました。この遊び場は、昭和60年ごろ、市の管理に移行し、現在も「桜公園」として子どもたちに利用されています。

そして、30年の時が過ぎて、退職を機に、「石ころ会」の元メンバーをはじめ、地域の高齢男性が集まり、地域の問題について話し合いました。「子どもたちを外で元気に遊ばせたいね」と話し合っていたとき、私が中国の友人から土産でたまたま凧をもらいました。「凧なら子どもたちも外で元気に遊べる」という話になり、メンバーの中に凧作りの経験者がいたわけではありませんが、中国の凧をモデルに凧作りを始めることにしました。ただし、製作はスムーズには進まず、飛ぶものができるまでに3年を要しました。凧を製作するにあたっては、作業場が必要となるため、私の自宅の一部を作業小屋として同世代に開放し、「出羽凧クラブ」を結成しました。それからはこの小屋が私たちの活動拠点となりました。

活動の内容

仲間と創意工夫しながら凧、竹細工などを製作

気心の知れた隣近所の同世代仲間が作業小屋に集まり、凧や竹細工を作りながら交流しています。凧の材料となる竹は周囲に協力を働きかけたところ、無償で譲り受けることができている。そのお返しとして我々が作った竹細工を差し上げています。

凧作りに関しては、毎年、学校側から依頼があり、文化祭に凧作りのブースを設けて、凧の作り方を指導しています。竹を竹ひご状にして、糸巻きなども竹で成型するため、人数分を準備するのに丸2日かかります。子どもたちも自分で作ることで興味が生まれるようで、完成した凧を外で楽しそうにあげています。

凧作りに使用できる竹は枝の出ている部分に限られますが、枝の出ている部分も有効活用したかったので、余った竹で小物入れやキャラクター小物を製作し、敬老会などに配布しています。



作業小屋の風景



キャラクター小物の一例

メンバー一人ひとりが活動の楽しさを満喫

- 夫婦一緒にいることがけんかの元。夫も妻もそれぞれ趣味を楽しんでいるので、良好な夫婦関係が築かれています。
- 友達の顔を見るのが楽しい。気晴らしにもなります。
- 言いたいことを気兼ねなく言いあえるので心地の良い居場所になっています。
- みんなの顔を見ると明るくなってきます。作業小屋は、「出羽凧クラブ」のメンバーに限らず、近所の方々の憩いの場になっています。

※作業小屋に集まったメンバーの一部の声を掲載しています

周囲との関わり

妻や敬老会の高齢者、地元の中学生など、幅広い人々との関わり

作業小屋と「出羽凧クラブ」はお父さんのために作ったものですが、竹下駄の鼻緒付けなどではお母さんにも協力してもらっています。家族の理解と協力が得られてきたことには感謝しています。

また、老人ホームなどに竹下駄を持っていくと、同年代の方々が懐かしさから「自分たちも作りたい」と言って、製作を手伝ってくれることがあります。凧作りをきっかけに、地域の子どもたちと交流する機会もできました。さらに、作業小屋は、近所の人々の近況や地域の出来事などを情報交換する場にもなっており、そこから新たな交流が生まれることもあります。

このように、我々の活動は妻や地域の高齢者、子どもなど、幅広い人々との交流につながっています。

活動で心がけていること

目標は、外で元気に遊ぶ子どもを育てること

最近、「子どもの安全性」が強く言われ、小刀や彫刻刀を持たせないなど、危ないことをさせない教育がとられています。今の子どもたちは、雪合戦でも手袋をつけていますが、それでは硬い玉を作ることはできません。素手でやるから硬い玉ができ、当たると痛く、だから当たらないように真剣に逃げて遊ぶようになります。その真剣さが今は感じられないため、我々が子どもたちに教える遊びの中には、「ちょっとした危なさ」を取り入れるようにしています。

例えば、こうぞの木の枝から鉛筆を作ったり、鉛筆を小刀で削ったりする体験をさせています。外で元気に遊ぶ子どもを育成することは、我々の「石ころ会」のころからの変わることのない目標なので、その実現のために日々試行錯誤して取り組んでいます。

これからの展望

喜んでいる方がいる限り、作業小屋での創作活動を継続

作業小屋は自由に出入りできる場なので、誰かがいないと何かが回らないということもないし、来なくて困ることもないし、来てもらって困ることもない。堅苦しいルールがないから、途切れることなく人が集まり、長年、この作業小屋での活動が続いているのだと思います。

凧、竹細工の材料の調達においても、周囲の協力が得られているので、それほど費用はかからず、費用面での心配もありません。また、製作したものを販売することなく、欲得なしでやってきました。こうしたやり方だからこそ、息の長い活動ができていると思っています。

我々が作ったものを喜んでもらえる方がいる限り、メンバーともども作業小屋での活動を続けていく思いです。